

## 孤高の人、二村克行先生への送別の辞

社会福祉学部准教授 藪本 知二

二村克行先生は、1975（昭和50）年3月に中央大学法学部法律学科を卒業後、いわゆる社会人生活を送られた。32歳の時に、学究の道を歩むべく駒澤大学大学院人文科学研究科に進まれ、社会学を専攻し、1988（昭和63）年3月に同大学院博士課程を満期退学された。同年4月からは、道都大学社会福祉学部専任講師として、本格的に学究生活を始めるとともに、大学教員として社会福祉教育に携われた。本学（当時、山口女子大学）は、文学部を改組して社会福祉学部を創設するために、特に理論面の柱として二村先生を招請した。それを受けて、先生は、1993（平成5）年4月に文学部助教授として着任された。

### 1. 社会福祉学部創設の貢献

先生は、本学に着任される前の1992（平成4）年の夏から、社会福祉学部創設のための準備作業に関われ、適宜適切な助言により1994（平成6）年4月の社会福祉学部創設へと導かれたのであった。

社会福祉学部創設のために二村先生が貢献された数多のなかからいくつかを以下に紹介する。

まず、学部新設の申請のためには、カリキュラムの編成や実習（当時、「社会福祉現場実習」）の枠組み等を決めなければならず、社会福祉教育をよく知らない準備作業メンバーには手に負えるものではなかった。先生は、着任前にもかかわらず、そのキーとなる役割を果たされた。特に、カリキュラムは、社会福祉を個人、家族、社会の3つの側面から考察すべく、編成されたが、その構想は、先生によるものであった。カリキュラムは、社会福祉学教育をどのように捉えているかを示すものであり、学部教育の個性（本学部の独自性）を決めるものであり、学部教育の顔である。現在から振り返ってみて、当時、極めて先進的なカリキュラムであったと評すべきものであると考える（ひょっとしたら現在でもなお先進的と言うべきかもしれない）。そのため、社会福祉学の学習・研究のベースに社会学を置き、「社会学原論」を学部基幹科目の第一に配置し、個人、家族および社会（地域社会と全体社会）の側面から社会福祉を学習・研究するために、「発達心理学」、「臨床心理学」、「家族福祉論」、「福祉文化論」、「地域福祉論」、「社会福祉法制論」を学部基幹科目として配置したのである。

次に、社会福祉学部の新設に行き詰まったことがほかにもあった。そのことで、先生の文学部改組実行委員会委員長であった岩田啓靖先生（本学名誉教授）から相談を受けたとき、問題解決のために一番ヶ瀬康子先生を頼るようにと助言された。一番ヶ瀬先生のお声かけにより、初代学部長の就任予定者として上田千秋先生を迎えることができ、一番ヶ瀬先生や上田先生のお声かけやご助言により、創設時の教員の多くを迎えることができ、カリキュラム編成と並ぶ難問を突破することができたのである。

そもそも、社会福祉教育を担う学部を立ち上げるには、準備作業メンバーは、社会福祉教育の「業界」をよく知らなかった。先生の助言により、学部立ち上げ予定の挨拶をすべく、日本社会事業学校連盟（現在、日本社会福祉教育学校連盟）の第22回社会福祉教育セミナー（西九州大学、1992（平成4）

年11月9日、10日開催)に参加した。筆者は、坪郷康先生(本学名誉教授)、三島正英先生(本学名誉教授)、山田富秋先生(現、松山大学教授)とともに参加して、社会福祉教育の重鎮の先生方に立ち上げ予定の挨拶をするとともに、情報収集にあたった。

以上のエピソードからも先生の存在なくしては、早晩本学部が開設されたとしても、1996(平成6)年4月に開設されることはなかったのではなかろうか。こうしたことを、先生は、あえて言うことはなさらないが、この送別の辞において披露して先生の本学部への貢献を讃えたいと思う。

## 2. 研究業績

先生は、学部と大学院において二人の碩学の下で学ばれ、研究を進められた。

学部では沼正也先生から家族法学を学ばれた。法学の世界の共通財産とも称される沼理論を十二分に咀嚼され、法制度の面から社会および家族に関する学問上の基礎を築かれた。また、大学院では山根常男先生の下で家族を社会学的側面からアプローチするとともに、単に社会学だけでなく、家族の研究に必要とあれば精神分析学や文化人類学、法学など様々な学問分野から学び、家族を多方面から研究する山根先生の薫陶を受けて、家族研究の基礎を身に付けられた。先生は、これら二人の先生から自らの学問の骨格と血肉をつくられたのである。

先生は、沼先生と山根先生という二人の学問の巨人の足跡を辿り、自らのものとすべく自己の学問研究に浸透させるとともに、これら二人の巨人の肩の上に立って、2015(平成25)年に家族研究の新たな地平を開かれた。

その成果が、『家族と家族福祉—家族福祉に寄与する家族理論をめぐって—』(梓書院、2015年)である。これは、沼先生と山根先生の学問成果の土台の上に、先生がここ10年近く取り組まれた哲学、政治学、経済学などの学問の基礎研究と動物学などの最先端の科学研究の知見とを総合して成るものである。先生は、その研究成果の一端を著すために、二人の恩師と同様に、ともすれば一人では困難な途を進みながら様々な学問成果を渉猟し、家族という学問対象を一側面からだけでなく、多面的・多角的に考察し、総合するという学問姿勢を崩されることはなかった。

本研究は、家族福祉という社会福祉の中核部分を構成する分野のために、それは単に研究にとどまらず、実践にも寄与する家族理論を提示するものである。これまで、家族研究の裏付けのある家族福祉研究は、十分には展開されてこなかったことから、本研究は、家族福祉の研究および教育の次元を変えるものであり、また、社会福祉の実務家に実践の理論を提供するものである。先生の定年退職までに本書が出版されたことは、まことに後進にとってかけがえのない贈り物であると思う。

最後に、あらためて本学部の創設と教育研究に多大な貢献をされた二村克行先生に深甚なる謝意を表して、送別の辞としたい。